

ふるさとと歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第三十三号 (二〇〇九年二月)

風に吹かれて(〇九ノ二)

白井啓治

『愉快人 愉快求めてぶらりぶらぶら』
つい先達てのこと、久しぶりに文化的愉快に出会った。出会ったといっても新聞記事のことである。これを文化的愉快と言うかどうかは、極めて個人的な感性の問題であるが、実に愉快な記事であった。

それは朝日新聞に載ったこんな記事である。『うどんのルーツ日本にあり 伝承料理研究家・奥村さん新説 こつこつ調査三〇年』というものである。

饅頭は、これまで中国のワンタンがその原型と言われてきたのだそうであるが、伝承料理研究家の奥村さんという方が三十年に及ぶ調査の結果、饅頭は、中国から伝わってきた切り麦から日本独特の食に進化してきて、固有の食文化となったのだそうである。

一見地味で、どうでもよさそうな話ではあるが、とんでもない。日本人にとって、日本の食文化にとっては大変な発見であると私は思っている。だから非常に愉快なのである。文化的愉快とはこうでなければいけないと思っている。

石岡に越してきてもう十年以上が過ぎた。八郷町と合併して新しい石岡市となつてますますこの

地の良さが高まり、気にも入ってきた。常世の国と表されただけの地であると思う。

しかし、石岡に越してきて残念に思うことがある。この地域、うまい食材は豊富なのであるが、美味しいものを喰わせてくれるところがないことである。特に美味しい郷土料理というものが無い。成り上がりの新興地さながらに地の深みを持たない味ばかりである。

故立原正秋氏が、その作品の中に頻繁に、それこそ後から誰かに刺されるのではないかと心配するほど奈良と信州には美味しい物がない、と書いていたが、この石岡という所はもつと酷い。食文化の発達していないところは、芸術性が豊かに育たない、と言われるがこの石岡を見ていると、その言葉はあたっていると思う。

石岡というよりは、常世の国と表されるこの地域全体が、肥沃で食材の宝庫であることをもたせているかのように、食文化の熟成が貧しい。貧しすぎる。

ワカサギは霞ヶ浦から全国に広がっていったのであるが、その美味しい名物料理となると他県に持つていかれてしまっている。長野県佐久の鯉は旨いと言うが霞ヶ浦で成魚になったものを持って行き冷水に痩せさせて佐久の鯉にしている。漬物の高菜も茨城産、夕張メロンも茨城産、京の水菜も

茨城産。OEMで金は儲かるかも知れないが、この地の食文化には「美味しい」という愉快は生まれ育ってこない。美味しいものがないから芸術・文化の成熟がない。常世の国なのに実に勿体ないことである。

華々しさは必要ないが、確りとした芸術・文化の成熟の無い所には人は集まってこない。愉快がないのだから当然である。芸術・文化の根源は食であると思っている。

この常世の国というふるさとから若い人がどんどん居なくなっている。働く場所がないという。若い人いわくこの地には魅力がないという。そりゃあそうだろうと思う。美味しいものがないのだから寄り付く人もいない。人が寄り付かなければ町が出来ない。町が出来なければ経済地域も生まれえない。みんなみんな食い物の所為です。と、言ったらさぞかし反感を喰らうだろうが、反感をもたれることで美味しい物が生まれたらバンザイなのだ。果たしてどんなものやら。

この会報をスタートさせた時、悪口でも大声で叫べば、そのうちそれが自慢話になる、と言ってきたのであるがなかなか自慢になつてくれない。まだまだ声が小さいのかなと思っているが、私も歳だ。休み休み叫ばないと少々疲れが出てくるというものである。しかし、そんなことを言つて一休みしてしまうとそのままズツと休んでしまいかねない。あと二年位は大声で叫ぶことを休んではいけなかなと勝手に決めて思っている。

しかし、ちょっと待てよ。私は大声で悪口を叫んでいるつもりになつてはいるが、実際には誰にも聞こえないぐらい小さな声なのかもしれない。

小正月行事に思う

ふたば自給農園 松山有里

一月一五日は小正月の日だ。スワラジ学園で教わった通り、小正月の行事を行った。まずは裏山から「ぬるで」という雑木を切ってきて、田の神様を作る。樹皮を五センチくらい残してあとは彫刻刃で白い肌が出てくるまできれいに削る。男女2つの神様を作る。女の神様は枝が二股になっているところを利用し、男の神様はまつすぐな部分。いずれも先をとがらせる。男女の性器のシンボルだ。他コナラの枝をまた裏山から頂戴し、臼をひっくり返したものにコナラを縄でくくりつけ、そこに成らせ餅をくつつける。(たくさん成ってほしから「ナラ」の木を使うそうだ。)臼の上には田の神様を並べる。それから小豆粥を炊き、田の神様に小豆粥をのせ、パンパン二拍手一礼し、今年の豊作を祈る。その後ぬるでの枝で作った箸で人間も小豆粥を頂く。日本には昔から神様と共に食す「共食」という考え方があつた。お正月の祝い箸の両端が細くなっているのも、ごちそうを歳神様と共に頂くという意味があるらしい。また小豆は体を浄化するといつて昔は毎月一五日にはかならず食べていたそう。ラジオで聞いていたら各地で小正月の行事が行われていた。資料として集めたらさぞかしおもしろいものになると思う。いづれも今年の豊作を祈願するものだった。日本全国一斉にこの日に祈願しているのだから、きつとどこかの神様には必ず当たりそうな気がする。想像すると楽しくなってくる。この田の神様は四月、苗代に立てる。その後のことは寛さん(私の百姓の先生)に聞きそびれているのだが、一番初めの年、友人の田んぼを手伝ったときには、苗代から

本田にもつていき、秋の収穫祭でこの半年ご活躍お疲れ様でしたと火にくべた。

男女が田んぼに入れば豊作になる、この単純さが純粹にいいなあとと思う。田に実りをもたらすためには男女が必要なのだ。昔の人の思いがよみがえる。この大らかさがいい。そしてなにより素晴らしいと思うのは豊作を「祈る」ことができるということだ。現代の農業は大型機械を使い、一反当たりどれだけの収量をあげられるかが大事で神様に「祈る」隙間もないような気がする。とれなかつたら技術不足か天候不順か、など神様以外に不作であつた理由を探さなければいけない。もちろんとれる努力はするつもりで、それがあつての神頼みなのだが、基本の部分でこの「祈る」という行為の上に成り立たなければ、人として生きるうえでも薄っぺらい仕事になつていつてしまふのではないかと思う。

私は時計を逆回転させて全て昔がいいとは思つていないけれども、ある部分あまりにも自分によるべがないことがつらいなと思うことがある。自由とか権利とか個性などという言葉が並べられていかに自立した経済人になつていくかを教えられてきたけれども、そこにはこのような小正月の行事が私にもたらす永続性への安心感はない。ここで百姓をやっていると「個性」なんてどうでもいい、誰が播いても同じ大根ができるというその素晴らしさに喜びを感じる自分がある。

日本人は集落ごとにご先祖様の帰る山があつて、命は順繰りにその山を通つて回つていくときいたことがある。その命の順繰りの中に自分が存在できていることを感じたい。そしてこの暮らして永

遠に続いていくのだと信じて毎日暮らしたいのだ。そんな昔のこととかそんな迷信だなんて言葉ではなく、昔の人の生き方になんとかほんの小指でもいいからひっかけられることで、日本人として生きるうえでのよるべをつかみたいと思つていふ。

小正月の行事はまさにそのよるべのひとつだ。スワラジ学園でこれを見て、体験したときは本当にうれしかった。これによりそつていけばいいのだというきつかけをつかめたからだ。

今年まだ予定ではあるが、これから一緒に百姓をやつていく彼と初めての米作りをする。彼と一緒に作つた田の神様は果たして今年活躍してくれるのか? 秋には収穫祭を迎え、田の神様をねぎらつて天に返すことができるといいなあとと思う。もう一度田の神様に祈つておこよう。

餅つき

小林幸枝

昨年暮れ、十二月二十八日のこと。ふたば自給農園の百姓・松山有里さんから、餅つき会に来ませんかとお誘いを受け、父と一緒に参加させてもらいました。父は、懐かしいなと大喜び。でも行ってビックリ。餅つきの経験者は、父と白井先生だけ。他の人は皆初体験。こりやどうなるのかなと思つていたら、父は一人大興奮。

何十年ぶりなのだろうか、薪割りをして火を燃やし、蒸籠にもくもく湯気をたてて大喜び。もち米が蒸しあがつたかと頻りに摘み食いして確かめている。

臼に餅がくっ付かないように水を張つて、米の

蒸しあがるのを待つ。白井先生のそろそろ大丈夫だ、という合図に、臼に張っていた水を捨てて蒸しあがったもち米を入れる。

早速ペタンペタンとつき始めるのかと思つたら、そうじゃないのです。杵で米を押しつぶすのです。半分ぐらい米をつぶしてから、やっつき始めるのです。

餅つきは、つく人と餅を返す人のタイミングが合わないとうまくつきません。何十年ぶりだというのに先生と父のタイミングはなかなかのものでした。時々、白井先生の返しが遅くなり、父が振り上げた杵をオトット、とじていましたが、とても楽しそうでした。

お餅は、お祝い事の時につく縁起物のようですが、先生と父の楽しそうな顔は、まさにお祝いをしているようでした。楽しく手際よく、つきあげないと冷めてしまつてお餅にならないのだそうです。

先生と父のお手本を見た後、代わる代わる餅つきを試しましたが、見ているほど楽にはつきません。私もついてみましたが、うまく杵を突きおろすことができませんでした。最後に、松山さんと、この春にご主人とられる人が、自分達の鏡餅をついていましたが、どうも冷めてしまつて半つき状態のお餅になってしまつたみたいでした。とても風の冷たく吹きさらした日でしたが、餅つきの後に食べた熱々のけんちん汁はとても美味しかったです。このけんちん汁を作ったのも白井先生。松山さんが、味付けをお願いします、と言うと豪快に醤油を流し込み、仕上げにごま油をさつと入れてかき回す。実に手際良いことでした。

ギター文化館をこぼ座の発信基地にしたこと

もあります。最近、この旧八郷地区がとても気に入りに入り、懐かしい所に思っています。私のお婆さんが八郷出身のせいもあるのかな？

こぼ座の二月公演では、白井先生と松山さんが瓦谷で畑仕事をしている時に出てきた、縄文土器の飾りに付けられていたと思われる顔の欠片をモチーフにして書かれた恋物語を舞いますが、毎年、年の暮れには、その一年の感謝と、新しい年への夢を紡ぐ楽しい餅つき大会をやりたいなと思つています。

過去を引きずって

菅原茂美

今この地球上に、人類という一つの「種」が存在する。女もいれば、男もいる。あなたもいれば、私もいる。

一体どこから来て、どこへ行くかとしているのだろう。祖先を辿れば、山の民か、海の民か。いや、その前、弥生でも縄文でもない。もつと前の旧石器時代は？火を用いるその前は？

なぜ直立二足歩行など始めたのか。なぜ大型類人猿と、次々枝分かれなどしたのか。なぜ大脳をこんなにも膨らませ続けたのか。また「ごんぼ掘り」が始まったが、考え出したら、キリがない。我が魂は時空を越えて駆けめぐる。

人類は、他の生物とは決定的に違う「特別の存在」などとは到底思えない。DNAの指令に基づき、個体・種族の生存に、全エネルギーを注ぐ。

他の動物と同じで、人の命も、一時的に、この体を通して、次の住みかに移っていく。人生は、儚

いドラマの一瞬だ。

個体の老化は世代交代で済むが、生存システムの疲弊は種の絶滅に繋がる。火山噴火など刻々変わる環境悪化に、自ら遺伝子変換できたもののみが、現在生き残っている。この五億年間に、酸欠などで全生物の九〇%前後も死滅した事件は五回もあったという。命とは、結構しぶといが、自然の前には、いともか弱き存在。

パスカルは「人間は獣と天使の中間に位置する」と言っているが、人類はこれまでの、無秩序な人口増加（オーバーポピュレーション）や、地球環境破壊に歯止めがかららず、更に他の種を、多数絶滅に追いやり、自分自身の子孫さえ、生存が危ぶまれる事態に至っては、天使には、限りなく遠いと言う感じを受ける。このように、人間の犯してきた罪の深さに気が付き、反省の意味を込めて、今日の「宗教」と言うものが生まれたのであろうか。人類にそのような謙虚な心があつたのなら、まだ救われるが…。

しかし、宗教の違いによる争いが、世界各地で絶えず、自分達だけが正しくて、他は邪悪なものとして排除しようとする狭量を、越えることができないのなら、大脳がチト膨らんだだけの、獣にも劣る愚か者と言うことになる。

人類は、敏捷性・平爪・歯・消化管・五官の鈍化などから見ても、肉食動物ではない。明らかに草食動物である。なのに種内で殺し合いをするのは、チンパンジーとヒトだけである。その前に枝分かれした、ゴリラやオランウータンは、そんな凶暴な動物ではない。むしろ、おとなし過ぎて絶滅が危惧されている。人類は進化の方向性が、途中で狂つたのだ。どんなに文明が発展しようが、

聖人君子が現れ、どんな説教をしようが、宗教対立は、エスカレートするばかり。全地球的な和平への道は、ほど遠い感じがする。狭い了見は何億倍しようが、狭量の塊である。人類は今日もなお、残念ながら悲しい運命(さだめ)を引きずって生きている。

ではその悲しい運命の本体は何なのか?…まず体の構造。我々の祖先である魚の左右の胸鰭(むなびれ)・腹鰭が、両生類↓爬虫類↓哺乳類と進化して四本の手足となった。七〇〇万年前、ヒトは生意気にも重力に逆らって二本足で直立した。そのお陰で今なおヒトのみが「痔疾」を病む。下大静脈(胸から下の半身の静脈血を右心房に送る)には「静脈弁」(逆流防止弁)がないため、肛門部に鬱血し易いからだ。四足歩行なら、下大静脈は地面に平行なので、肛門部に鬱血することはない。心臓は、廃品回収する右心房の吸引力が、しっかりしないと、体のあちこちに老廃物が溜まり、新陳代謝がうまくいかなくなり、七〇〇万年前の過去を引きずって病気になる。自然に逆らった天罰か?…。

魚の鰭(ひれ)がたついでに、鰭の先には多数の軟骨や硬骨からなる鰭条(きじょう)があるが、これが哺乳類などの手足の指骨となる。指の数は八本が基本。進化が進むにつれ、指の数は減り、ヒトは五本、サイは三本、ウシは二本、そしてウマは第三指一本が残った。蛇類などは、指どころか、足さえ退化し、ニシキヘビとボアは足の痕跡を、クロアカ(総排泄口)の脇に一对残すのみとなった。

ヒトは指六本以上あるものを「多指症」といい、一人に十五人ぐらいあり、そんなに珍しいこと

ではないという。イギリスのチャーチル元首相、ヘンリー八世の後アン・ブリンはいずれも手の指が六本であったという。大リーガーのアルフォンセカ投手は全手足とも指六本であった。またタイの洞窟壁画には、指六本の人の手が描いてあるというし、トルコには、指六本の家系が多数あるという。

このように進化というものは、祖先の形態を長く引きずり、ある形が「固定」したかに見えても、多少の変化や、先祖返りは、しばしば見られる。副乳・多毛症・眉丘の突出・オトガイがない・停留精巢(睾丸が腹腔から陰囊に下りてこない)・石坂洋次郎作「青い山脈」の「山桜女史タイプ」(鼻「花」より歯「葉」が先に出る)など、数え上げたらキリがない。このように、人とはこういうものだ:と固定観念に執着してはいけない。まして一般とはチト異なるからと、偏見を持つのは以ての外。即ち進化は、現在進行形で、わずかの違いは、当然有り得るもの。「出っ歯も愛嬌」ぐらいの「寛容」な態度が必要で、バリエーションの範囲内なのである。

我々現生人類は、生物学上の分類は全てみな、ホモ・サピエンス(知性を持った人間という意味)であるが、世界中には、どう見ても知性ある人間とは言い難い独裁者や、狂乱市場を牛耳るヤカラや、無数の詐欺師など、多過ぎはしませんか?…こいつらに比べたら、まだチンピラヤクザのほうはずっと可愛らしい。いずれにしても、こういう「清濁」全てが同じ人種であるという現実こそ、真実であり、それを引きずっているのが世の中である。

さて、「首・肩痛」は、重い頭部をもろに背骨の

上に乗つけたためであり、「腰痛」は上半身の全体重を、か細い(太すぎる人もいるけど…)腰部に一極集中して負荷を受けるためである。それぞれ、それなりに受ける筋肉や骨を鍛えておけば、重症にはならない。その他、生活習慣病の「メタボ」は、麻生総理じゃないが、『運動もせず、たらたら飲み・食べ放題で莫大な医療費がかかる』と嘆くが、人類が野生時代に、常に飢えに怯え、喰える時にたっぷり食べ込む「習性」という、遠い過去を引きずっているからであろう。総理よ!あまり怒りなさんな。

人類も野生時代なら、そんなに長生きすることはなかった。寿命は、化石の物証などから、学者は、三五歳ぐらいか…と云っている。

信長は『人生五十年…』といって、今わの際に能を舞ったが、戦前の日本国民の寿命も、信長時代と余り変わらない。今の発展途上国も、ほぼ同じ。なにしろ抗生物質もなく、慢性的に栄養不足。近代医学開花の夜明け前である。

その人類が、先進国では、寿命は伸びたが、軀幹筋や骨の劣化は、甚だしい。そして心臓は丈夫だが、脳細胞の劣化は酷いものだ。

なにもかもアンバランス。私など、パソコンの漢字を、クリックするから、稚拙ながら、こんな文章が書ける。原稿用紙に、ペンで漢字を書けといわれたら、先ずお手上げだ。ケータイや財布を忘れ、人の名前を忘れ、二つの用が、同時に足せない。アレッ!なにしに二階上がったのか…ハタと戸惑ったり。あゝ、次は徘徊か?日頃の散歩は徘徊の下見か?…。悲しき予備軍となりにけり。

それ故、昔のように、五〇歳ぐらいの寿命なら、

アルツハイマーも認知症も、癌もほとんどなく、アンバランスに陥る前に、感染症や事故などで生涯を終えたのかもしれない。認知症の悲しさは、付きつきりで介護した者でなければ、分からない。あれほどしっかりしていた人が、なぜ?…どうして?…と、かわいそうになる。

このように人は、各臓器の傷みに応じて、それ相応の病態が現れ、人生の終末を迎える。病気がならないにしても、日常の生活において、ホルモンバランス、血液の化学平衡、新陳代謝など、みんな太古の過去を引きずっている。

さて次は精神構造。長く卑屈な心を持ち続けられ、急に高貴な人格となり、オーラを発することはなからう。また、私みに、仕事上の論文はかなり書いたが、文学には全く疎かった。それが人真似して、今、ものをチョイト書いたぐらいでは、行間に漂う芳醇な香りなど、あるわけがない。人は、長年積み重ねたその実績により、名工と呼ばれ、達人と呼ばれるのである。それまで過ごした習慣・努力などで、その人の終末は輝きもすれば、黄昏もするのである。厭でも心でも過去を引きずる。

そして、人類の最も忌まわしい精神構造は、狡猾・謀略・権謀術数。過剰な欲望を抑えきれず、人を殺めてまでも手に入れようとする醜さ。そこまでやらなければ、人類は生き残れなかったのか。お人好しは、抹殺されたのか。

人類は火を用いたのは一〇〇万年より古いらしいが、ほぼ四〇万年ぐらい前から火で調理し、ものを食べるようになった。丁度そのころから大脳が急速に膨らみ始めた。即ち、栄養の豊かさが張り大脳を増長させた。ネアンデルタール人は、

大脳容積は現生人類より二〇〇cc近くも大きく、化石人骨の分析(窒素安定同位体)から、殆ど肉食に近かった。そして種としての寿命は、わずか二七万年と非常に短かった。

現生人類は、同じホモエレクトスから三〇万年前、枝分かれしたネアンデルタール人より、一〇万年後輩である。もし今の先進諸国の栄養過剰生活を続け、ネアンデルタール人並の種の寿命とすれば、我々現生人類の残された種の寿命は、あと七万年しかないと言ふことになる。未来学者は、良くて後一〇〇万年、環境汚染がこのまま進めば、あと一万年そこそこ言っている。今は正に人類の智慧が試されている時だ。

さて、非常に好奇心の強い私は、何にでも、すぐ強い関心を持つ。それが「軽薄」と思われるかも知れないが、やれば何でもできるような気になくなる。やりだしたら結構、根気は続く方だと思ふが、残念ながら、トコトン技を極め抜いたとは、とても言えない。即ち、その道のプロにはなりきれなかった。サツキがブームだった頃、仲間と一緒にサツキ盆栽に凝った。一時は二百鉢も抱え、無我夢中。以来、三六年間、今は特選一二鉢に絞り、太いものは、立ち上がりしがビール瓶ぐらいになったが、展示会などで入賞するほどのものではない。

囲碁は大学生時代に有段者であったが、以来五〇年、随分と努力は続けた。しかし、それから数段、階段を上ったとは言え、到底納得のいくものではない。今でも毎日研鑽の日々である。

趣味で日曜大工をやっている。電動工具を、七種類も備え、家人に便利がらわれているが、出来はまあまあ。家中のそれぞれのスペースに合わせ

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会は、今年6月で4年目を迎えます。

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会を行っております。

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

て、棚・物置・ガーデンテーブル・椅子など自給自足。孤島に漂流でもしたら、どうやって生き抜くか。遊び心と瞑想は尽きない。

それから花咲か爺さんで、いつも庭をうろつろつ。常に何かの花で庭をにぎわそうと、心がけているが、いずれも自己満足。孫に喜ばれると、目尻を下げてメロメロ。ただし、やつとカトレア・胡蝶蘭を太陽熱だけで毎年咲かせるようになり、これは大いに自己満足。

そして私にとって、とびっきりの好奇心発露は、人類の歩いて来た道程（みちのり）に、どんな障壁があり、それを乗り越えるどんな遺伝子変換があったかが、最大の関心事である。本や映像で知るのではなく、この目で直にそれを確認したいという、飽くなき探求心である。

二〇万年前、東アフリカで誕生した現生人類の祖先・新人は、今から七万年前、生まれ故郷アフリカを、わずか数百人の規模で飛び出し、アラビア半島に辿り着いた。それから人口も、一人一人ほどこに増え、これから北に、東にと進路を進めつつあったその時、インドネシアのトバ山が超巨大噴火を起こした。煤煙は何年間も空を覆い、地上に太陽光は、わずかししか届かず、氷河期なのに、なおも寒冷の追い打ちをかけた。気温は一気に、一〇℃も下がり、夏でも雪が降り、多くの動植物が息絶えた。全人類の祖先であった一万人も、アツと云う間に、三千人ほどの絶滅寸前まで追いこまれたと言う。これは、女性から女性へと伝わったミトコンドリアDNAの解析によって証明されるのだという。

それほど大きなダメージを与える火山噴火とは、一体どのようなものか？…。長年私の大きな

関心事であった。その矢先、一九九〇年、雲仙普賢岳が噴火した。私はすぐ飛んでいき、その火砕流が人里を飲み込んだ様子を、この目ではっきり見てきた。火砕流は、民家の二階の屋根のみを残して、埋まりきっていた。電柱も頭の部分をチョット残しているだけ。そのすさまじさは、ただ事ではない。

一九九五年の阪神淡路大震災も、直後に見に行ってきた。死者六千三百人・負傷者四万三千人・全半壊家屋二〇万九千戸。地震や噴火とはこのように、強大なものであり、動植物ともに生存が危ぶまれる。そのような環境の激変に、遺伝子を変換して耐えたもののみが今日、過去を引きずって、子孫として生き残っている。

私の弥次馬根性はなおも止まらない。人類発祥の地はアフリカの熱帯である。アフリカではないが、同じ熱帯の中生代で、獣医の国際協力の仕事があり、熱帯の動植物を見たさに、喜び勇んで参加した。先ず狂犬病の予防注射を受けて。治安も衛生も極めて悪い。事実私はアメーバ赤痢に感染し、辛うじて命を取り留めた。毒虫・毒蜘蛛・毒蛇。マラリア・黄熱病・デング熱などの感染症。極めて危険は多いが、それ以上に好奇心をそそるものが満ちあふれている。熱帯の動植物は、見慣れた中緯度のそれとはまるで異なる。まるで異次元の世界だ。人々の生活様式もまるで違う。驚くほど時間はゆっくり流れている。経済は遅れている。人々の心は、真に豊かであると実感した。ヒトとは何か？の「ごんぼ掘り」の一環であるが、熱帯は誠に面白い。後日改めて記事にしたいと思っている。

さて、生命誕生以来、海で、単細胞生物時代を

二十六億年過ごした後、生物は、今から十億年前、やつと多細胞生物に進化した。エサを取り入れ、消化・排泄・感覚器官などがそれぞれ分業し、大分まともな生物らしくなってきたが、種内の遺伝子は皆全く同じ。多細胞生物とはいっても、増殖方法は、相変わらず枝芽を出して増えるクローン増殖である。個体による遺伝子のバリエーションは全くない。

そこで、種内皆同じ遺伝子では、環境の激変（海の水温変化・塩分や酸素濃度の変化・硫化水素など有毒物質の発生）に耐えきれない。なんとかしてこの激変に耐えうる「多様性」が必要となる。そこで生物は一大決心をして、今から七億五千万年前、これまで生命の基本仕様は「雌」なので、付属的ではあるが、「雄」というものを発明し、種の保存を図った。生殖の時、雌雄互いに遺伝子を半分ずつ持ち寄って、ごちゃ混ぜにし、新しい命を誕生させる。ごちゃ混ぜのいかんによって、きょうだいでも多くのバリエーションを生ずる。当然或る者は生きられ、或る者は環境に適応できず生存ができない。

そもそも精子・卵子の相性が悪ければ『胚』は育たない。ゆえに雌は多数の雄と乱交し、いずれかの精子（遺伝子）が適合すれば、新たな命が誕生する。こうして生物は多様性を獲得し、生存域を拡大し、種の数を増やしていった。

ところが人間は、へんに聖人ぶって、道徳とか社会規範とかを、大げさに振り翳し、色々な「戒律」などで、ある宗派を律するなど、世界的に多くの歴史が残っている。

物の本によれば、江戸川柳に『品川の客にんべんの有ると無し』というのがある。江戸遊里のナ

ンパーワンが、吉原とすれば、品川はナンパーツ
。品川は宿場町。江戸四宿で最も繁栄しており、
道中奉行から遊女500人を置くことが認められ
ていた。実数はその数倍はいたというから、吉原
をしのぐ勢いであったという。

客は船頭・馬方・伊勢参りの旅人・大店の檀那
衆等町人のほかに、川柳にある、にんべんの有る
のが参勤交代などの「侍」で、無いのがお寺さん・
即ち「坊さん」である。どちらも懐は豊かであり、
上客であった。勿論江戸時代僧侶は、妻帯禁止。
遊郭出入りなどでの外。発覚すれば、「女犯（に
よぼん）の罪」として罰せられた。普段は見逃し
ていた奉行も、虫の居所が悪かったか、寛政八年
江戸町奉行、坂部能登守の命により、岡つ引きな
どが、各遊郭に踏み込み、僧侶を一斉検挙し、六
七人を日本橋のたもとに、三日間晒し者にしたと
言う。（永井義男説）

戒律は断食や妻帯禁止など、DNAの基本的な
「種族繁栄」の主旨から言ったら、ナンセンス極
まりない。また一部宗派や部族などでは、今なお
「割礼」の宗教儀礼・通過儀礼などが行われてい
るといふ。人類史上、宗教は、人権を無視した暴
走がしばしば見られる。

このように人類は、生存のための遺伝子変革・
食や異性確保のための序列闘争。利を求めての策
謀などのため、大脳肥大化が進み、毒饅頭と化し
た。人類はこの毒饅頭巨大化の故に、幾多の犯罪
を積み重ねてきた。先ほど例に挙げた草食動物な
のに、仲間を殺害する。歯止めが利かず、巨大な
戦争にまで発展する。文明の進歩は武器の進歩。
愚かな進歩である。救いようのない過去をひきず
って生きている。

オスロで〇八年一二月三日、民間活動団体（N
GO）が呼びかけ、一〇〇か国が集まった国際会
議で、あまりにも非人道的なクラスター爆弾（小
型爆弾を多数内蔵し広範囲の敵を攻撃、不発弾が
いつまでも残り、多数の民間人が死傷）の使用禁
止条約に各国が署名した。しかし、大量保有国の
アメリカ・ロシア・中国の三か国は署名しなかつ
た。とても世界のリーダーなどとは言えない。要
するに「同時多発エゴ」だ。自分さえ良ければそ
れでよし。人類は、どこまでも、欲望の無制限拡
大という「毒饅頭」を戴いて生きていかなければなら
ないのか？。大脳肥大という、呪われた過去を
引きずって生きていかなければならない運命なの
か？
ヒトはサヴァンナに進出して、このように悪たれ
小僧になったというなら、も一度森に帰り、人生
をやり直す、いや進化をやり直す事ができないの
か。日本など豊かな森は沢山ある。里山は国土の
20%も占めるという。そこでゆっくり暮らせば、
自然の摂理を会得し、政治家も経済人も、あなた
も私も「天使」になれる……。

Coffee & Tea Room

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・
蕎麦会席料理のお店です

（ギター文化館通り）

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30 ~ 15:00

16:00 ~ 18:00

月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。

合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、

お気軽に、お立ち寄りください。

（石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可）

あの人の死を知ったのは晩秋の縁日の日だった。

「また一ヶ月後伺います」

と別れたばかりだった。何と無情なことかと仏前に手を合わせた。あの人と知り合って何年になるだろうか。

四季折々の縁日の朝、一緒にお堂の掃除をし、お詣りをしてお茶を頂く。そんなささやかな付き合いであったが、振り返ると十年を過ぎている。

人の一生はドラマだ。誰もがドラマを持っている。…と、よく聞くが私もそう思う。短い長い違いはあっても生命を燃やしてそれぞれのドラマが出来る。一人として同じものはないと思う。

あの人は苦しい中でも負けなかった。常に前向きに生きてきた人だったと思う。人一人を理解することは長い時間が係る。先ず一緒に仕事や活動を通して、話しを交わす中にお互いをより理解し合うという気持ちが生まれる。そして育っていくのだと思う。私は、あの人を通して時代背景や人間関係、山村という環境、地域の風習を知ることが出来た。

あの人の結婚は昭和の二十年代に入って間もなくだった。戦争が終わり民主主義を手にして活力のある時代を迎えた一方で封建性を引きずる混乱期でもあった。嫁いで来てから状況が話と大分違うのに気が付いたという。実家の兄さんは、「相手は良さそうな人だから頑張れ。土地や家は働いて造ることが出来る」

と励ましてくれたという。騙された話は三十年代に入っても彼方此方であった。

姑は連れ合いと女の子を亡くし悲しみのどん底

にあった。本家から借りた狭い土地に荒屋を建て貧しい生活の中で暮らしていた。小言を散らし威張るだけが毎日の仕事の様な振舞だった。

土地は自分達のものではなかった。谷原や荒地を許しを乞うて使わせてもらった。道具も無く借りるものは壊れているものばかり、それを修理して使う。無いものは工夫して作るという具合で時間がかかった。僅かな土地が地瀬ぶりされた時は悔しさに涙が止まらず姑に言ったが、

「言うな。騒ぐな」

と口止めされた。この時姑の人柄の一面を感じた。

家は掘立小屋だった。大雨が降って沼や田の水が増し、山の方から押し水で床ちかくまで漬かって土壁が剥がれる。水が退くと壁の芯の竹だけが残る。夏は其の儘でいいが秋から冬になると風が遠慮なく入る。それでも年内に壁を直すことも出来なかった。そして次の年もそのままだった。その穴から近所の人の動きや話し声が聞こえたという。しかし、この地域では、同じ状況の家は何軒もあったそうだ。

食べ物は耕作する場所がないのだから大変なことであった。

「縄文時代のように採集が多かったよ」

と笑って聞かせてくれたが、沼の物、山の物、道端の物何でも食べた。薪木もなく苦労したのは勿論だった。土方仕事、普請手伝の間賃などでやっと現金が入ったが、それらも祝い毎、人寄せの為に廻ってしまう。餅についても赤飯を炊いても一切れも一粒も残っていないかった。釜、お鉢にくっついた物、鍋に残った一匙を水で増やし啜って腹を満たすことは日常茶飯事だった。私の食い

分など誰も気に止めてくれなかった。後片付けの耳に聞こえてくるのは頬張りながら話す嫁の悪口や世間の噂などの賑やかな声だった。食べることに出来ず沼に身を投げた女が何人かいたという話もあった。負けてなるもんかと歯を食い縛ったものだという。

子供が出来た喜びは大きかった。味方が出来たとも思ったそうだ。子が泣き出すと

「産んでくれると頼んだ覚えはねえ。煩え。何とかしろ」

と怒鳴られる。寝つくまで背負って歩き、落着くと座って抱いて一晩中そのままだったこともある。この子らが大きくなるまでは死んでたまるかと心で叫んでいたそうだ。

財布は姑が握っていたから鉛筆一本だつて自由には買えなかった。若い時貯めておいた金を小出しにして用立てた。兄さんが心配してもってきてくれた話で夫は出稼ぎに出た。弁当を作り朝早く送り出した後自分は新聞配達をした。家に戻る頃には家族が起き始め朝食にする。そういう日々を何年か送りその後は勤めに入った。

付き合い事には必ず参加した。集まるのは男衆だったが平気だった。女、分家、余所者という目で常に見られていた。言葉の端々にも感じ、座る席も一段低かった。待遇はどうあろうと話は漏らさず聞き帰れば伝えた。PTA、地域の団体活動にも参加し、子ども達の成長と共に自分の社会も広めていった。楽しかったそうだ。

姑は外面はらしと威張っていたが、少しづつ弱くなっていくことを感じた。ある時、

「威張るだけ威張ってやってきた。何も思ひ残すことはねえ。俺が死んだらその辺にほっぽり投

げといてもいいがらな。ああ！言いてえこと言っ
て、すつきりして終われんな」

と言つて間もなく寝込んで今までの面影と違つ
安らかな表情となつていた。白湯を含ませてやつ
た時、

「俺もいよいよ終わりだ。頼みてえことがある。
お堂の掃除を頼むよ。俺らは仏さまの前に住まわ
せてもらつてるんだから有難いことだ。だから俺
はずつとやつてきた。今度はおめえがやつてくれ。
頼むよな」

この言葉が最後となつた。親戚付き合ひ、近所
隣の摩擦に負けまいとして生きてきた人の中に
優しい暖かいものがあつたのをその時知つた。

あんなに虐められ、食べる物も思うようにい
なかつたあの人は姑の残した願いをずっと続けて
きている。この人を支えてきたものは何だろう。
そこには嫁にすべてをゆだねた姑の姿と心があつ
たからだろう。嫁はそれをしっかりと受けとめたか
らだと思つた。

あの人は生きている間には良いことも沢山あつ
たと話してくれた。豪農に生まれ育つた幼い日の
幸せは赤衣着物の自分と兄と母の姿がいつも胸の
奥にあり体中に暖かいものを交わしてくれていた
と。娘時代東京の叔父の家の養女になつた時今迄
の世界とは違つた沢山のものを知つて積極的に覚え
ていった楽しさは頭の中に智慧を沢山貯えて、今
まで頑張つたもとなつたと言つていた。

そつという時代だつたから仕方がない。と片付け
がちな意見が多い。でも時代に流されず甘えず生
きたいと思つた。あの人の頑張つた日々、悔しさ、
悲しさそして喜びも感じてあげたいと思つた。でな
ければあの人の存在すらなくなつてしまふ。私自

身の生き方を考えていく上でも大事なことだと思
つた。

衣食住が満ち足りたような今、寿命が長くなつ
て時間をもてあます今、女性たちは自分の時間を
満喫している姿が多い。批判はしませんが、楽し
むだけであつてほしくない思いがある。親の生き
てきた時代を学ぶことやすぐそばにいる人へのお
もいやりを忘れないで欲しい。でないと体の中に
流れている生物本能はいつ齒をむきだすかわから
ない。隣の人を傷つけ戦いをひき起こしかねない。

実際日常に起きてくる事件、世界のあちこちで絶
えない戦争は人の心から出ているものだ。
理性や豊かな感性を持つことが出来た人間だか
らこそ弱い人、苦しむ人に目をむけ、手をかして
一緒に生きていけるようにしたい。

ふるさと風の文庫

新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(・)

(二冊組：1000円)

菅原茂美待望の第一作「遙かなる旅路」(1)(定価：500円)

打田昇三：ふるさと「風にたずねて」(・ / ・)

(二冊組：1000円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!

ふるさと「風のことば」(定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を詠いたエッセイ集

兼平ちえこ「風に押されて」(定価500円)

小林 幸枝「風に舞う」(定価500円)

白井 啓治「移ろう時の中に」(二冊組：800円)

近藤治平「ふるさとの風に吹かれて」(二冊組：800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館：0299-46-2457

・いしおか補聴器：0299-24-3881

にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局

石岡市石岡 13979-2 (白井方)

電話 0299-24-2063

歴史ガイドに同行して(9) 2) 兼平ちえい

当「ふるさと風」の一月第三十二号にご案内しました「石岡の陣屋門」につきまして、ご愛読頂いております方から、「従来県指定史跡であったものが、何故建造物指定となったのでしょうか」とのご質問をいただきました。そこで今回は「常陸国風土記を歩く会の皆さんへのご案内」の道草編として、このご質問に対して、調べましたことをご紹介しますと思います。

文政十一年(一八二八)に建設された陣屋門は火災にあった江戸小石川の藩邸を再建する際の余材をもって造られたといわれています。今年で百八十一年の命もさまざま歴史を潜りぬけ、役目こそ閉じられましたが、しっかりと保存されながら「温故知新」と私達に語りかけているかのようです。しかし、穏やかな現在のお姿を拝観出来る迄には郷土を愛する市民の熱烈な物語がありました。

昭和四十一年七月、市民会館建設のために県指定文化財の陣屋門が移転されるという報に、昭和八年に発足して積極的に歴史研究と、保存活動を展開していた石岡史蹟保存会を中心に移転反対運動が起こった。

『陣屋門は建物と、その地点が指定されているものでこの門の位置を変更することは史蹟としての生命を奪い文化財に対する逆行行為であるものです』と移転反対を表明した。

二ヶ月後、昭和四十一年九月には約八〇〇〇人の市民が陣屋門保存会の会員となった。市議会議員七名と五つの市民団体が連名で市民会館の建設

延期を要求する趣意書を市側に提出したが、翌年昭和四十二年建設工事は着手された。

陣屋門の移転問題は凍結されたまま工事が進められ、狭い三叉路の一角にある門は、車にぶつけられ屋根に草が生え傾き始めていた。

昭和四十三年四月、市民会館がオープン。次々と行われる市民会館の文化事業の前に陣屋門は暗い老朽化した過去の遺物となってしまった。元より陣屋門は、大正時代に実科女学校(現石岡二高)の正門として活用されていたが、同女学校が府中の現在地に移転後、石岡小学校(創設明治六年)に受け継がれ同小学校の校門として親しまれて来た。県は昭和三十五年三月に有形文化財史跡に指定した。

三年間の反対運動に疲れてきた市民も市の移転案のように陣屋跡内の石岡小学校の敷地内に移し、修復復元して保存することこそ次善策と望む声が高まる。

昭和四十三年九月、陣屋門は県指定有形文化財として史跡から建造物へと指定変更され、翌年昭和四十四年三月、ついに移転の工事が行われることになった。

私は以上の経緯を知り、残念至極でなりませんでしたが。新と旧の共存、どちらも生かす事が最善策であったのではないのでしょうか。歴史の里「いしおか」だからこそ、新と旧磨き合って。

覆水盆に返らず、ではあるけれど、ふとこんなことを思ってしまった。陣屋門が元の位置に戻ったならば、現在の市民会館の存在も、オープン当時の市の発展を感じさせる明るい光に復活するに違いない、と。

最後に、石岡史蹟保存会の創始者の一人であった今泉義文氏(昭和五十一年十月永眠)の言葉が、写真にみる石岡の昭和史研究会出版部発行の「写真集いしおか昭和の肖像」に四十年に及ぶ史蹟保存活動を振り返っての言葉として、載っているものでそれを紹介しておきましょう。

『……史蹟保存と開発の問題は、現在文化全体にまたがる大きな問題といえましょう。

……現代のように社会機構が大きくなると開発事業も大きくなり、史蹟も簡単にのみこまれてしまわうわけです。しかし、よく考えてみると史蹟保存は政治以前の、広く文化に対する感覚の問題でしょう。我々の祖先がいままでとにかく伝えてきた文化遺産を考えもなく破壊し去るのは実になさけないことです。開発計画も一寸した配慮で史蹟を救うことができるはずですし、また適切な代案が考えられるはずです……。これからの若い人々には、我々の世代が十分には果たし得なかつた面つまり学術的な究明を強く希望するものです』

・ 雨 暖 かい

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。あなたの庭の土で...、大好きな雑木林に一滴みの土を分けただき、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。オカリナの製作:演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

0299-55-4411

「貧窮の問答の歌一首 ……竈(かまど)には火気(けぶり)ふき立てず 甑(こしき)―蒸器)には 蜘蛛の巣かきて 飯炊ぐ(かしぐ)事も忘れて 鶺鴒(ぬえどり)―夜鳴く鳥)の のどよひ(細い声で鳴く)居るに いとのかきて(甚だしく)短き物を 端截(はしき)ると 云えるが如く 楚(しもと)―税)取る 里長が声は 寝屋戸まで来立ち呼ばひぬ かくばかり すべて無きものか 世間(世の中)の道…」

山上憶良が、税を絞られる油粕のような庶民の姿を万葉集の「貧窮問答」に詠んだのは白鳳から奈良時代である。それから概ね二百七十年ぐらい経って紫式部が源氏物語を書いた。

その頃には生産技術も税制も民衆保護の政策も進んだであろうから冷酷な里長は居なくなつたと思いたいのだが、さらに千年経った現代でも「…予算が足りなければ税制を改正して国民に負担をさせれば良い…」と考えている安直で単細胞の政治家ばかりなので、少し心配になつてきた。

「政治」という言葉の意味はいろいろあるが、一番重要なのは「人民の生活を支える」「不正を糺(ただ)す」ことらしいから、まず国民の為になければならぬ。税を取る前に議員の定数、役人の数から国会のトイレットペーパー使用量までを徹底して調べ、公用車を軽自動車か自転車・リヤカーにするぐらいの工夫を重ね、無駄や効果のないものを完全に除き、これ以上は…という段階で初めて増税の話が出るのが筋であろう。

古代からの日本は天皇、皇族、公家たちが一夫多妻制で多くの家族やら召使などを抱えていた。

給料が安くては暮らしが成り立たない。収入は全部庶民の税である。何時の時代も山上憶良ほどではなくても、過酷な税が課せられていたであろうと考えざるを得ない。

「源氏物語」は、言わば搾取していた者たちによる非生産的な享樂の世界の物語であるから貧困庶民の末裔としては抵抗も感じるが、芸術となれば別で、世界に知られている作者のことも日本の誇りとして記憶しておきたい。特に紫式部や伊勢大輔など有名な文学熟女(失礼)は、何かと石岡に關係が深いようなのである。

紫式部については大勢の国文学者が研究を続けていて、父親が藤原為時、母親は北家・長良流の藤原為信・娘で式部は次女、そして五歳ぐらいの時に実母を亡くし姉も早くに失った。二十七歳で同族の藤原宣孝と結婚し一女・賢子を生んだが三十歳で夫に死別、本人も四十を越して間もなく没したらしい…ぐらいのことは考証されている。

ごく近年に「紫式部の屋敷跡」が現在の京都御所の東北部に近い「上京区寺町広小路上る北之辺町三九七番地」だと発表された。そこは天台宗の分派・円浄宗の本山であり、節分の鬼追い行事が有名な廬山寺(ろさんじ)である。

廬山寺は、金閣寺に近い洛北の船岡山麓から戦国時代初期に現在地へ移されたのだそう、紫式部を意識しての移転かどうか…円浄宗を興したのは比叡山延暦寺中興の祖と称される慈恵大師良源であり、式部が天才少女と言われ始めた頃の寛和元年(985)正月三日に大往生を遂げたので、元三大師(がんさんだいし)とも呼ばれている。

当時は住民票も無かったから、いつ頃迄の住居かは分からないが廬山寺のある場所は「鴨川堤」

に在つたとされる式部の少女時代の住居跡である可能性が極めて高いようである。この屋敷は式部の父方の曾祖父で、中納言を務めた藤原兼輔が庭園に凝つて造つたと言われている

前号「二二」でも触れたが政府高官にはなれない中級官僚にとつて、諸国国司への任官は名実ともに有難い話であり、式部の父・藤原為時が高齢ながらも越後守に任じられたのは、後宮における式部の功績に負うところが多いと思う。

また、式部の同母弟である藤原惟規(のぶのり)が三条天皇の藏人(公設秘書官)に採用されたのも式部への配慮が窺える人事である。それなのに惟規は職を辞して越後へ戻らぬ旅に出た。

「都にもわびしき人のあまたあれば
なほこのたびはいかむとぞ思ふ」

死の床に詠んだとされる歌である。この人は歌人として知られていたようで「今昔物語集」には「…いみじく和歌の上手にてなむありけるとなむ語り伝えたとや」と締め括る話がある。

孫が父親(紀伊守になつた貞職)さだのり)から聞いた話らしいのだが、異国で淋しく死んだ人物には似合わない内容であり、職を捨てて妻子親族を捨てて急な遁成をした藤原惟規にも元氣な頃があったという証拠に、少し長くなるが紹介しておきたい。「藤原惟規、和歌を詠みて免(ゆる)されし語(ものがたり)」という題である。

―一条天皇の時代には定子皇后の下に清少納言を中心としたグループが、また彰子中宮の下では紫式部を中心としたグループが、共に文芸サロンを形成し華やかに競い合つていたとされる。そして、もう一つ平安女流文学(特に和歌)の有力な原泉と目された「大齋院」こと選子(せんし)内

親王のサロンがあった。

この女性には村上天皇の第十皇女（母親は道長の叔母）である。一説では「源氏物語」は退屈な選子さんが彰子さんに「何か面白い話はないか」と言ったのが始まりで書かれたとするが、物語のスケールが大きすぎるから多分、嘘であろう。

そもそも大齋院とは何なのか？柿岡にある丸山古墳ゆかりの豊城入彦命は崇神天皇の長男なのに皇位に就けず、母親が同じ妹の豊鋤入姫命は「神鏡」が御神体として伊勢神宮に収まるまで齋宮として奉仕しこれを守っていた。大和朝廷の地盤が不安定なため兄妹が苦勞させられたのである。

以後、伊勢神宮には皇女又は女王が齋宮として置かれたのだが、それに倣って賀茂神社に奉仕したのが齋院（いつきのみや）である。

賀茂神社の祭神は別雷命（わけいかづちのみこと）稲作を中心とした産業の神」と、その母親の玉依媛（たまよりひめ）神武天皇妃に充てられている）であるが、本来は大和朝廷が近畿地方に進出する際に全面的な協力をした古代の名族・賀茂氏を祀る神社なのである。

賀茂氏の祖先は、不勉強で理由は知らないが、サッカーのマークに使われている八咫鳥（やたがらす）に化けて神武天皇を助けた。出身が曖昧な大和朝廷には大恩人の地方豪族である。

桓武天皇は平安遷都に際し鎮護の神として賀茂神社を現在地に祀り、嵯峨天皇は「薬子の変」の鎮圧などで神様のお世話になったお礼として賀茂神社に齋院を置くことにした。

嵯峨天皇以来、歴代天皇が皇女の一人を充てていたのだが、選子内親王は五代・五十数年に亘り交代せずに務めたので「大齋院」と呼ばれた。

大齋院のためだけに齋院司（さいいんのつかさど）という役所が置かれ、長官以下の役人が勤務していた。当然だが女性の職員が多かった。そのお付き女房の一人に若き日の藤原惟規が求愛攻撃を仕掛けたのである。当時の結婚形態としては間違っているが無かったけれども、齋院さんは「生涯に亘り独身」なのだから場所が良くなかった。

ラブレターを自分で配達に行った帰りに警護の武士に見とがめられ姓名を聞かれた：「齋院は神に奉仕する聖地」だと承知はしているから素直に名乗れず隠れてしまった。警護の武士たちはヤツカミ半分で急いで門を閉じたのである。

惟規は出るに出不れず、さりとて大齋院のお屋敷内に泊まる訳にもいかない。相手の女房が大齋院選子に「恥ずかしながら」と申し出た。

生涯に異性と握手さえ出来ない選子にすれば、呆れるやら羨ましいやら「知らん！」と突っぱねるのが普通なのだが、さすがに大齋院様「門を開けよ」と命じてくれたので助かった。

相手の女房から事情を聞いた惟規は、その場で「神垣は木の丸殿にあらねども

名のりをせねば人咎め（とがめ）けり」という一首を詠んだ。女房から歌のことを聞いた大齋院選子が「木の丸殿（このまろどの）のことは私も知っていたが、良く惟規が歌に詠むことをしたものだ」と感心をされたのである。

今昔物語集：注によれば「このまろどの」とは荒削りの木で建てた殿舎のこととか、中大兄皇子（天智天皇）の行宮（あんぐう）一仮の宮殿をそう呼んだという。新古今集の天智天皇の歌

「あさくらや このまろどのに わがおれば 名のりをしつ つ ゆくはたが子ぞ」

惟規は、その歌を念頭にしていたのである。

「このまろどの」が置かれた場所には筑紫説と土佐説がある。その頃は日本が百済を救援し朝鮮半島で新羅・唐の連合軍と戦って負けた時代であるから、天皇以下総出で九州・四国まで出かけるければならなかった。歴史学者の中には日本に新羅や唐の軍隊が進駐してきた！という人もある。意図的に隠されたり削られた歴史も多い。

「このまろどの」のを知る藤原惟規は余程の博識だったのである。早世した母親を同じくする兄弟姉妹は姉と式部と惟規の三人だけかどうか確定的ではないが一男二女とされている。紫式部は鴨川堤の家で暮らした家族のうち、母、姉、弟の三人を早々と失い、残る老父は遠い雪国に居た上に一人娘の賢子は父親に預け放しであったから為時と越後へ同行したと思われる。やがて父と娘は越後国府の直江津（上越市）で、卒然たる式部の死を知らされることになるのであるが：

一条天皇の薨去による彰子中宮の境遇の変化、そして自分の身内の不幸と、式部には堪え難いほどの変化と寂しい出来事が続いた。彰子皇太后や伊勢大輔らに慰められたり、お互いに気遣ったりしながら式部は辛くも職に留まり、悲しみに耐えるために源氏物語の著述に打ち込んだ。

その源氏物語は主人公である光源氏が五十二歳となり、出家を決意して果たせず、煩惱のうちに消えなければならぬ第四十一帖「幻」の巻にかかっている。次の「匂宮（にはふみや）」では光源氏の死後、既に八年が経過しており、やがて四十五帖からは作者が別人？を疑う説もある「宇治十帖」へと移ってゆくことになる。

宇治十帖の主役は、光源氏の姪に当る「浮舟」

である。物語の世界とは言っても薄幸のヒロイン「浮舟」が多感な思春期を過ごしたのは石岡市になる訳なのだが：漫画やお伽噺の世界にも故郷があるのに歴史の里だという石岡が「浮舟」に着目しないのは勿体ない。いかにも軽そうな「浮舟煎餅」ぐらいいは地元名物に有つてもよいのでは：

長和五年（1012）の春、傷心の身に健気に仕える紫式部に、或る日、彰子皇太后が遠慮勝ちながら少し弾んだ声で伝えた。

「：式部、そなたには相済みぬような話なのだが：伊勢大輔が高階成順殿に嫁ぐことになった：高階の家から通うことになるが、仕事は続けてくれる、と言っておった：」

「真にございますか？」式部は自分でも驚くほど明るい声で問い返した。皇太后は内心、ホッとされたように式部の顔を見て何度も頷いてみせた。

「大輔が、一番にそなたに知らさねばと、気を揉んでおつたのだが：そなたの気持を思うと中々に言い出せなかつたのであろう：祝うてやつてくれるかのう：」

「勿論にございます。大輔殿に、余計な気遣いをさせて申し訳ないことです。成順様は堅実な方と伺つております。お似合いと存じます」

式部は大輔と高階家との結びつきに、自分も繋がる運命のようなものを感じていた。その関わりは式部の没後に生じることになるのだが：

「わらわは高階の方々のことを案じていたが、成順殿は式部大丞になられたようで、良かったと思つておる：伊周様のことがあつてから、久しく目度い話を聞かなかつたからのう：」

彰子皇太后は、一条天皇の第一皇子で高階系の従姉妹（定子皇后）が生んだ敦康親王が皇位に就

けず、皇太子にもなれず、時代が円融系から冷泉系に移つて三条天皇の代となつたことに残念な思ひを抱いている。二人の我が子は父・道長の力で皇位が約束されているのに：心は重い。

伊勢大輔の夫となる高階成順の勤務先・式部省は礼式と公務員の勤務評定を扱い大学を管轄し、時に天皇に進講したりするから長官は優れた親王が任命された。成順が射止めた式部大丞（しきぶのだいじょう）は局長（判官）職で正六位下に叙される。紫式部の父親・藤原為時は学者で長らくこの職に在つた。因みに正六位下の官位は常陸国では長官に次ぐ（実質上の長官で、大掾の上司になる）「介（すけ）」の地位であつた。

高階本流は「藤原伊周の事件」に連座して暫く役職に就けなかつたが、ようやく儀同三司母と呼ばれた貴子の甥・成順が復権を果たした。式部は伊勢大輔に、成順の出世と二人の結婚を心から祝福したのである。

「当然のこと」などと言うと現代では差し障りがあるかも知れないが、伊勢大輔の夫となる高階成順には複数の妻子が居た。前々号で挙げた史料「高階家の悲劇」によれば伊勢大輔以外に成順の妻だった女性というのが、石岡ゆかりの平国香の玄孫なのだそうで、これも奇縁に思われる。

源頼朝の死後、清和源氏が絶えた後の鎌倉幕府を支えていた北条氏は桓武平氏を称して、平将門を討つた平貞盛の次男・維将（これまさ）から分かれたとする。維将―維時―直方、その平直方は検非違使に補職されていて、紫式部の没後十五年ほど経つてから関東で起こつた「平忠常の乱」を鎮圧する指揮官を命じられた。

この事件は将門の反乱と同様に中央の腐敗と圧

政に抗議する地方の抵抗運動と考えられている。将門の母方の孫であつた忠常は上総国の事実上の長官として君臨しながら茨城・栃木・千葉にも勢力を広げ、それが強大化していた。

地方の実態を知らない政府は、直方に僅か数百の兵を預け、然も現在の選挙と同じで「出陣の儀式」などという馬鹿げた行事で時間を浪費した。緊急出陣なのに出発日は陰陽師が占つて決めるなど役にも立たないことで四十日を無駄にした。

勝てる訳が無い平直方は当然のように大敗を喫して職を解かれ、代りに鎮圧を命じられたのが清和源氏の源頼信である。その時に頼信は甲斐守として甲府に來たばかりであつたが、敵が平忠常と聞くと旅行気分・鼻歌まじりでやつてきた。

頼信は以前に常陸介として石岡に赴任していたことがあり、関東に名前が知れている。常陸国府でも事実上の長官OBが反乱鎮圧の指揮官として來たのでは粗末に出来ない。早速、判官職の大掾惟幹が三千騎を率いて石岡から利根川の沿岸まで出陣し、頼信の指揮下に入ったから討伐連合軍は瞬く間に大勢力となつた。

気の毒なのは平直方である。現代で言えば国家公務員のキャリア試験に合格して、警察庁の幹部だつたが軍人ではない。わずかな兵を付けてのんびりと戦場に送り出されてもどうしようもない。

その点、当時の源氏は、戦功で諸国の国守に任じられてはいるが本来はプロの武装集団である。合戦はお手のもの、平忠常も「源頼信が来る」と聞いて驚かない訳にいかない。形だけは抵抗したが、すぐに諦めたらしく反乱は半年足らずで片付いた。忠常が重い病に罹り戦意を失つて頼信に降伏したとする説もある。

商売とは言いながら、源頼信の手際の良い仕事捌き（武勇）に感心した平直方は、頼信の子の頼義を娘の婿に望んだ。この夫婦の間に生まれたのが有名な八幡太郎義家である。

その平直方の姉か妹が、伊勢大輔より先に高階成順と結婚していた。勿論、当時のことだから二重結婚でも不倫でもありません！その上に貞盛の孫に当る平維時（直方の父）は紫式部の伯母か叔母が母親だったようであり、維時の妹は紫式部とも大の仲良しだったと考証されている。

一条帝皇后（藤原定子）の兄・伊周が花山法皇に矢を射かけ、さらに彰子中宮（当時）らを呪詛した罪で九州へ左遷された際に左衛門尉（さえもの）の（じょう）の職にあった平惟時は罪人に当る伊周を現地まで護送している。左衛門尉は宮廷の外周を警護し天皇の行幸に先駆けする任務を持つ役所の下級幹部で、常に弓を背に負っていたことから「韃負尉（ゆげいのじょう）」と呼ばれた。

平将門を討つてから、筑波山周辺に在った広大な領地と常陸国府における大掾の職を弟の繁盛に譲り都へ上った貞盛は、藤原氏に抑えられている社会で清和源氏と同じように、公家の嫌がる仕事を貫つて営業を始めた。

やがて源平二氏は藤原政権の軍事面を担当する専門家として競い合うことになるが、桓武平氏は清和源氏のように「荒くれ」に徹し切れず、藤原氏の模倣に近い立場を維持していたようで、平家滅亡の原因もそこにあるとされる。

それはともかくとして歴史を疎かに出来ない。「これは！」と思うような所に貴重な史実が埋もれている。特に日本六十余州で最上の国とされた常陸国、その国府が置かれていた石岡には奈良・

平安時代にかけて著名な人たちが来ていた。一方では、この地から都へ出稼ぎに行った兵士の子孫が一時的にせよ天下を手にしたのである。

石岡市史には「常陸大掾氏の発展」という項目で、高階成順や紫式部の名前が記録されている。前半の記事は「宇治拾遺物語」に採録された「伯母（はくぼ）の事」という短い物語に依っている。原文の主人公は伊勢大輔なのだが、市史ではタイトルのように大掾氏の威勢（傲慢ぶり）を主に書かれているから物語の主人公である伊勢大輔の名も娘である伯母の名も出てこない。これでは話が限られてしまう。市史でも格調高くありたい。

その頃の大掾氏は中世以降に石岡に来た支流からの馬場系大掾氏では無く、本来の桓武平氏源流を継承し筑波山麓に城郭を構えていた日本有数の大豪族・多気（たけ）大掾氏である。地方高官として常陸国府に通っており、ボスとして君臨していたから石岡にも関係することなのである。

さて彰子皇太后や紫式部らに祝福されて伊勢大輔を妻とした高階成順は、十年以上も式部大丞の職を務めた後に、福岡県知事に当る筑前守に補されて現地へ赴任した。妻の大輔が同行したか単身赴任だったかは分からない。さきに述べた史料には九州防衛の拠点である太宰府（だざいふ）の少式という職を兼務したことになる。

兼務とはいえ太宰少式は中央官庁の少納言より高い正五位相当の官職であるから本来は大出世の筈であった。ところが現代でも何処の職場にも一匹ぐらいは棲息する「イジメ屋」が居て、そいつが成順の上司の太宰大式だった。

本人が強欲で、妻は天皇の乳母だった関係から藤原道長の威を笠に威張り散らすので手が付けら

れない。皮肉にもその馬鹿が紫式部の夫の甥にあたる。成順はかなり苦勞をしたようだが、それでも無事に任期を満了して都へ帰った。

九州在任中に受けたイジメが原因だったかどうか分からぬが、帰京した高階成順は仏心に執着して自分の屋敷に人々を集めては線香くさい話をして暮らしたらしく、間もなく「筑前入道乗蓮」という法名で出家したとされる。石岡に関わりのある事件は、その頃に起こったのである。

ギター文化館

2009 CONCERT SERIES

- 2月15日 鈴木大介 ギターリサイタル
- 3月15日 荘村清志 ギターリサイタル
- 4月18日 國松竜次 ギターリサイタル
- 5月5日 マヌエル・カーノ コレクションコンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

0299 - 46 - 2457

Fax 0299 - 46 - 2628

物語のタイトル「伯母」は「おば」と間違いそうだが「伯（はく）の母」である。「(一)」で述べたように伊勢大輔の実家である大中臣家の者が、しばしば任命された全国の神社を統括する「神祇伯（しんぎはく）」のことを単に「伯」と言った。この場合は神祇伯になった康資王（やすすけおう）を指している。花山法皇の孫である。

康資王は花山法皇の子・延信王（のぶさねおう）と、高階成順・伊勢大輔夫妻の娘との間に生まれたのである。娘の名は不明だが「伯の母親」だから「伯母」又は「康資王母」と呼ばれ伊勢大輔と共に「後拾遺和歌集（白河天皇勅撰）」歌人として歴代主要歌人の一人に入っている。

「月はかく雲のなれども見るものを
あはれ都のかからましかば」

当時、紫式部は既に他界していたが、高階成順夫人となった閨秀歌人の伊勢大輔は、これから述べる事件で悲しい思いをしたのである。良きにつけ悪しきにつけ平安時代の歴史が身近に存在していたことは広く知られるべきだと思ふ。

原文は「今は昔、多氣の大夫と云う者の、常陸より上りて愁訴する頃……」で始まる。本来は中宮職の長官を大夫（だいが）と呼び、大夫（たいふ）と言う場合は四位と五位の公家の敬称になる。

常陸大掾は七位の職で大夫は名乗れない筈なのだが石岡市史に事件当事者の多氣維幹と子の為幹とともに「従五位に叙され」とあるから始祖の平国香と同じく鎮守府將軍を兼ねていたのか？しかしそれならば都で然るべき待遇が受けられると思うのだが……多氣維幹は何か裁判沙汰で上京し仮宿中だったらしいが「従五位」に疑問がある。

その宿の前が高階成順と伊勢大輔夫妻の屋敷で

あり、毎日、主の法話があるというので、退屈しのぎに出かけてみた維幹はすぐに飽きた。堅苦しい話は聞かずに他人の屋敷内をウロウロ歩き回り奥座敷に年頃の娘が居るのを見つけた。

いくら金持ちでも田舎のオッサンは余り都のことを知らないから（従五位が貰える訳がない）垣間見た京美人の姿形に一目惚れした。高階家の奥女中を呼び、持ってきた黄金の粒を渡して聞くとこの家のお嬢さんで婿を探していると云う。

黄金の粒を増やし「俺にお嬢さんを会わせろ」と言えば、報酬だけ受け取って首を横に振った。

「それならば乳母を紹介しろ」と言うと、簡単に承知して庭の隅に呼び出してくれたので乳母には百両に相当する黄金を袋ごと渡して、半ばは誘拐のような逢引きの仲立ちをさせた。

「常陸国はユートピアですよ」と言ったかどうか世間知らず温室育ちの娘は乳母と金持ち爺に騙され、あつと言う間に筑波山麓へ連れてこられてしまったのである。両親は嘆き悲しんだが常陸国は遠い。そのうちに犯人の一人の乳母が茨城の名産を馬に積んでお詫びに上京した。

「お嬢さんは筑波山麓の広大なお屋敷に大勢の使用人に囲まれ楽しく幸せにお暮らしです」と嘘の報告をしたから、家族も一応は安堵して手紙を交換するようになった。

「……あさましく心憂しと思へども、いうがひなき事なれば、時々うち音ずれて過ぎけり……」と原文には書いてある。

都の妹からは次の歌を送る。

「匂ひきや都の花は東路に

常陸の国にいる姉からの返歌
こちらのかへしの風に告げしは」

「吹き返すこちらの返しは身に沁みき

都の花のしるべと思ふに」

物語は続く。騙されて多氣大夫の妻となった女性、つまり常陸の姉は娘二人を生んでから若くして没したらしい。妹というのが物語の主人公「伯母（はくのはは）」なのである。

姉は短命だったが（田舎暮らしのせい？）妹はかなり長生きで西暦1100年以降まで生存したらしい。伯母として物語に登場したのは1060年頃で、その時に三代半ばと考証されている。妹は伊勢大輔の妻子、姉は異腹のようである。

さて、そうなると高階成順の妻として確認されている女性は伊勢大輔と、もう一人、平維時の娘（平直方の姉妹）らしいから、多氣の爺さんが金の力で連れて来た高階家の長女が実は「平氏同族」だった可能性がある。最初から双方合意の縁組がなされていて、それが石岡市史で記述しているように桓武平氏常陸大掾の「超成金ぶり」を強調する話が変わったかも知れないのだが……

「……年月へだたりて伯の母、常陸守の妻にて下りけるに、姉は亡せにけり。娘二人有りけるが、斯くと聞きて参りたりけり。田舎人とも見えず、いみじくしめやかに、恥ずかしげによりけり」
—妹の伯母は康資王を生んだ後に、再婚して常陸国府長官の夫人となった。

現在の石岡小学校の近くに豪壮な官舎があり、そこで暮らしたのである。ややこしいが叔母さんの伯母さんが石岡に居るといので筑波山麓（多氣山城）から二人の姪が挨拶にやってきた。姉が遺した二人の娘は姉に良く似ていた。

四年の任期が過ぎて、伯母の旦那が都へ帰ることになった。餞別を持って来ないので「催促をし

ろ」と言われた伯母が、筑波へ連絡すると姉妹が二十頭の名馬と、他の馬二百頭に満載した土産を持ってお別れに来た。名馬は一頭でも現在の高級外車に相当するブランドである。

常陸守は驚いたり喜んだり「常陸国の豪族は桁が違う！」と褒め称えた。ここでは「常陸守」となっているが、実際には次官の「常陸介」である。

「守」は都にいる皇族で現地へ来ることは無い。格付けで大国の上にある常陸国は、官僚の収穫も多い。その欲深い国司が驚く程の選別が届けられたのである。この時の国司（介）藤原基房は京都へ戻って直ぐに病死した。あまりにも多くの餞別を貰って心臓を悪くしたのである。この人は藤原道長の父・兼家と兄弟同士の熾烈な権力争いを展開した兼通の玄孫に当る。父親も常陸介だったことがある。茨城県には父子で稼がせて貰った。

「…この伊勢の大輔の子孫は、めでたき幸人多く出で来給ひたるに、大姫君の斯く田舎人に成られたりける哀れに心憂くこそ」―で物語は締めくくられている。つまり「どのような財力が有ろうとも、田舎者は違うのだ」という差別意識で物語が書かれている。それが当時の「都人」の感覚である。うけれども：羨ましさも含まれている。

茨城県民としては「常陸国を馬鹿にするな！」と叫びたいところだが「田舎者」と言われても仕方がないような事件が同じ時代に起こっている。

石岡市史では、多氣の大夫が起こした婦女誘拐事件と一緒に書いてあるが、こちらのほうは旦那と一緒に常陸国へ来た歌人・伯母が生まれる何年前の話で、国文学を研究される先生方が専門誌に意見を発表されている。

原典は長和五年から二十年間に亘って記録され

た参議左大弁（中納言と少納言の間に位置する重職）源経頼の日記（左経記）であるとか。

―常陸大掾の職を世襲する多氣大夫の威勢は上司である常陸介（実際の国守）を圧倒するほど強大で富と権力を乱用し横暴な振舞いも多かった。事件が起きた時の常陸介は、紫式部の弟（異母弟である）藤原惟通であり多分、先に述べた平維時と交代に石岡へ赴任して来たのであろう。

その藤原惟通が寛仁四年の夏に国府官舎で病死してしまった。一般的に言われている式部の死からは六年ほど後のことである。

形としては自分の上司が現職のまま死亡したわけだから、常陸大掾・多氣の大夫（この場合、二代目の維幹か三代目の為幹か、或いは四代目の繁幹なのか誘拐騒動そのものと合せて諸説がある）は、政務はもとより葬儀万端を張り切って執行っていた。惟通の本邸は京都にある。異郷に残された妻は途方に暮れ、身辺整理も覚束ない。

妻の名前は不明だが、多氣の大夫は実に親切に遺族の面倒をみた。ついでに寝室にまで入って未亡人をお世話してしまった。石岡市史では「妻子を奪い取り…」とあるが、その様な乱暴はしなかったと思う。「俺が面倒を見るから石岡に居ろ」などと言ったかも知れない。

「…常陸大掾に強姦された！」とリアルな表現で官に訴え出たのは、本人ではなく姑こと惟通の母親、つまり藤原為時の妻であり、紫式部・姉・惟規の三人には継母に当る女性である。式部の父は寛仁二年に死亡しているから、この時は未亡人であろう。都に居たと推定される。

健気にも「田舎爺に泣き寝入りはしない！」と訴状を出したから朝廷でも放っておかず常陸大掾

である多氣の大夫を召喚した。しかし大豪族は屁理屈を申し立てて簡単には出頭して来ない。

その背景には当時の権力者・藤原道長以外に存在の際立つていたある公家と常陸大掾家との主従関係が推定されている。都の役人がシビレを切らす頃になって、多氣の大夫は刑事事件の被告人らからぬデカイ態度で京都へ出かけて行った。

平将門を討った平貞盛には、恩賞として官位が与えられたが、協力した弟の繁盛は無視された。その代り貞盛が相続した広大な領地は繁盛に譲られ「日本一」とも言われる金持ちになったのだが、人間は愚かなもので、少し金が溜まると次には名誉が欲しくなる。現代でもそういう連中が自分の能力を考えず政治家に成りたがる。そして日本は山上憶良時代に戻りつつある。

紫式部が一人娘の賢子を出産した長保元年（999）は、藤原彰子が一条天皇の許に入内した年であるが、その頃に官位や名譽が欲しい常陸国の大地主・平繁盛も、藤原一門のある高官を訪問して形式的だが主従の誓約をしたという。膨大な献上品が玄関先に山と積まれた。

その頃は藤原道長の株が急成長を始めていて、門前がゴマスリで賑わっていたのだが、混雑を嫌う田舎人は空いている屋敷を訪ねてみた。それが賢人と称され後に右大臣となる藤原實資（さねすけ）の邸宅であり主は古参の中納言であった。

實資は道長と同じ藤原北家であり祖父の實頼が道長の祖父の兄になる。實資は「小野宮流」という儀式・故実を確立し、裕福でも知られた人物で孫の實資を見込んで養子とし小野宮流を伝えた。道長に対し北家主流と故実を楯に只一人ブレーキをかけることが出来た人物らしい。

實資が天元五年（982）から長元五年（1032）迄の五十年間に亘る克明な日記をつけていたお蔭で、平安撰閔政治の実態や当時の宮廷行事が解明できたと言われる。常陸国の豪族・多氣大掾氏は、時流に流されずに藤原實資を主筋と仰いでいたので、これは褒められる。

幾ら一夫多妻の時代でも、上役の未亡人を喪中に口説くという冒険？を仕出かした多氣の大夫は藤原實資という強力な後ろ盾があるから役所の召喚にも臆せず都に來たのである。結局、被告人は法廷にも呼ばれた氣配も無く、一年ほど都に滞在して都会暮らしを楽しみ無罪放免になった。

勘ぐれば、この京都滞在は「伯母の事」にある「：上りて愁訴する頃：」に似ている。原典の「宇治拾遺物語」が出來た時期が鎌倉時代初期と推定されており、これらの話は太掾氏と同族である北条氏が、八田氏の野望と源氏の思惑で多氣大掾氏が潰された（北条氏も仲間に入ってはいたが）ことを惜しんで「桓武平氏の威光」を回顧追慕する意図で創作させたようにも思えてならない。

大掾氏は源頼朝の命令で支流の馬場系が水戸近郊から石岡に進出して本流を継承し、戦国時代まで続いたのだが、室町時代から衰退を始めて往年の威勢は妙な伝説にしか残らないのである。

大きく逸れていた話を三条天皇即位の頃の後宮に戻すと、藤原道長の専制に目を瞑らなかつた藤原實資は中納言から大納言に昇進していた。この職務は「天下喉舌（てんかこうぜつ）の官」とされて、天皇の言を下達し、臣下の意見を奏上する際に可否を判断する権限が与えられていた。

三条天皇は一条天皇と同じく藤原道長の姉を母としていたが、三条帝生母の超子は年齢が離れて

いた上に若くして他界したため、姉弟でも道長とは疎遠だったとされる。然も父帝は狂気の噂を持つ冷泉天皇である。道長の父・兼家の思惑から三条帝は十一歳で皇太子に立てられていた。

先帝の一条天皇より四歳年長で、二十五年間も皇太子をやってきたから、天皇の理想像も飽きるほどイメージしている。颯爽と登場して思い通りの政治をしようと玉座へ座ってみたら、目の前に撰政関白の叔父（道長）が居て動きが取れない。この天皇は重い眼病を患っていた上にストレスで少しづつ耳まで悪くなつたらしい。

道長にすればどこが悪くても言うことさえ聞いてくれれば文句は無いのだが、理想とする天皇親政を目指し正面から突っ張りて攻めてくるから道長は得意とする「嫌がらせ」で対抗することになる。道長は天皇即位の段階から自分の孫を皇太子にしてあるから、退位されても困らない。

その一方で道長は彰子皇太後の妹・妍子（けんし）を三条帝の後宮に入れていた。三条帝には早くから藤原濟時（道長の父の従兄弟）の娘・城子（せいし）が居て、成人した敦明（あつあきら）親王を始め多くの男・女子があつたから後継者の心配を道長にして貰わなくてもよかつた。

即位と同時に天皇は敦明親王の生母・城子を皇后にしようとした。道長は強引に自分の娘の妍子を推してきたのである。困つた天皇は苦肉の策で異例の「二人皇后（中宮）」を提案した。道長は儀式などで城子の立后を妨害したと伝えられる。

そういう逃げ道の無い追い込みに遭つて、かつ病に苦しみながらも三条天皇は、道長に対抗して何とか自分の政治を実現しようと頑張つた。道長

の天皇に対する嫌がらせの例が中央公論社刊「日本の歴史」にある。根拠は先に述べた「小右記」などであるから本当の話である。

三条天皇は、まず「儀式や祭礼の在り方」を見直すことにした。もし、この天皇が生きていたら「石岡の祭り」にも厳しい注文をつけたと思う。

折しも京都では一大行事となる「賀茂祭」を迎えようとしていた。既に述べたように賀茂社は伊勢神宮と共に皇室が関わる神社である。当日は公家たちも参列するのだが、その衣装が年ごとに贅沢で派手になっていった。「税を納める庶民が困窮しているのに、無駄に生きる貴族階層が贅沢をしてはいけない」と三条天皇は思つたのである。

長和二年（1013）三条天皇は即位してから三年目になり賀茂祭は四月に行われる。公家や後宮の女房たちは、例年通り競つて派手な衣装で牛車に乗り祭礼見物に行く予定をしていた。それを見越して天皇が「賀茂祭に於ける服装の制限について」という規制文書を出すことにした。

天皇の意思を役所に伝達するのは蔵人（秘書官）である。天皇の言葉を書いたメモを太政官に居る左大臣に渡せば済むのだが、今回は天皇の言葉を聞いて蔵人は息をのんだ。華美な服装の総本山が道長で、太政官を牛耳っているのも道長であるから猫の親分に「鯉節禁止令」の制定を頼みに行くようなもので、怒られるのは必定、悪くすれば職を失うことになる。メモを持つて固まっていた。

薄々、事情を察した天皇は「實資に命じよ：」と言つてくれたので、秘書官は天皇に頭を下げるのも忘れて座を立ち、大納言・藤原實資の許にメモを届けた。實資は当然のように勅命の趣旨を公家たちに伝える文書を作成し、自分の上司である道長には報告する形で部下を行かせた。

その役人は怒られもせずに戻って来て道長からの返書を実資に見せた。それには「：天皇の仰せご尤もであり、公家たちは従者の数を減らしたりして行列が派手にならないよう注意しなければならぬ」と立派なことが書いてあった。

祭礼の当日、大納言の藤原實資は自ら街角に出て祭り見物の様子をチェックした。公家たちの行列は例年に変わらず、中には以前に増して派手な服装の公家も居た。そして一番に豪華だったのが藤原道長の一行だったのである。それでも公家たちは實資の姿を見て隠れたりしたという。本来ならば天皇が出した禁令であるから、これを役人は取り締まるべきなのだが警察署も市役所も「祭礼のため本日臨時休業」の下げ札を出していた。憤慨した實資は有りの儘を天皇に申し上げた。

「不届き者を放つて置かないように：」達せられたので、違反者全員から「始末書」を提出させ、道長を通じて天皇に差し上げるようにした。道長は始末書を全員に返して一件落着にしたらしい。

賀茂祭の反乱？があった翌年の長和三年は甲寅の年、干支初めの寅だから勢いが良い筈のだが、何となく冴えない年になった。正月から大空には妖しげな彗星が現れ、人々は天変地異の前触れだと怖れた。天文学を担当する博士が止せばいいのに「これは近々、異変が起こる前兆でござる：」などと内密で天皇に奏上したから、心痛の重なる天皇は、遂に片耳が聞こえなくなってしまうた。道長は「政務に支障のあるような天皇は退位して頂くほかはない！」とあからさまに言い出した。

正月明けに彰子皇太后は病に罹り暫く床に臥すようになつた。父・道長の三条天皇に対する悪辣な嫌がらせに心を痛めたストレス性の病気なのだ

が、当時の医学書には無いから医師は適当な病名でごまかし、後は坊さんのご祈祷に任せた。

或る日、三条帝中宮の妍子が見舞いに訪れたので彰子皇太后も幾らかは元気になった。中宮は前年の初秋に内親王を生んでいる。共に天皇となる二人の親王を授かつてはいたが、女の子に恵まれなかつた皇太后は、生まれたばかりの姪に格別の愛らしさを感じていた。禎子（ていし）と名付けられたこの内親王は、やがて彰子の子・御朱雀天皇の皇后に冊立されて後三条天皇を生む。姉妹は内親王の話題で久し振りに安らぐ時を過ごした。

「：姉上、近頃の父上のなされることには何かお感じになれませんか：」

会話が途切れた時に、妍子中宮は思い詰めたように言いかけたが、傍らに控える紫式部らに気付いて声を落とした。

「この者は心配いりませんよ」

皇太后は式部を残し、他の女房たちを退席させてから中宮を促して言葉が続けさせた。

「：父上は帝の退位を早めようとなさっております：皇太子の母君であられる姉上に申し上げるのも変ですが、敦成親王は未だ七歳、ご譲位には早過ぎると思うのです：率直に伺って姉上は如何にお考えなのでしょう：」

母親を同じくする姉妹ながら、最初から天皇に配するために育てられてきた長女の彰子と次女の妍子は性格も違い、天皇妃となった経緯も違う。

道長の思惑で急遽、三条帝に送り込まれた妍子はその鬱憤もあってズケズケとものを言う。

「中宮の仰せになりたいことは良く分かりますよ：私もこのところ、父上のなさりようは強引に過ぎると感じております。帝がお加減を悪くされ

たのもその所為があるのでしよう。ただご退位については、何よりも帝のご意思で決められなければなりません。幾らお加減が優れなくてもお申し出の無い限り、臣下が口にすることは：」

いつもは温和で冷静な姉が、少し高ぶつた感情でいることに妹は気付いた。

「：今の公家たちは、殆どが父上の顔色を窺うばかりで、帝のお役に立ちそうにもありません。ただ大納言の實資だけは違うように思われますので、實資に申し付けて帝をお守りし、ご自分からご退位のことなど仰せられないように致させましょう—そうじゃ明日にでも、この紫式部を實資の許に遣わして、私たちの思いを伝えることに致そう：中宮は他のことを考えず内親王を立派にお育てすることだけを考えておられますように：」

妍子中宮は、皇太后が穏やかな顔つきに戻ったことに安心して住居の上東門院へ帰った。

三条天皇が、道長の圧力はあつたが主に眼病など健康上の理由で退位したのは長和五年（1016）一月二十九日と記録されている。道長の野望も叶い、一条天皇の第二皇子で彰子中宮を母とした敦成（あつひら）親王が九歳で後一条天皇として即位した。三条天皇第一皇子の敦明親王は二十三歳にして十四歳年下の天皇の皇太子になった。

三条帝の命は退位後一年数か月しか無かつた。崩御と共に皇太子・敦明親王には何処からか無言の圧力がかかり、遂に自分から辞退を申し出た。

途端に待遇が良くなって、道長の娘・寛子（皇太后の異母妹）の婿に迎えられ、立派なお屋敷を与えられた上に「小一条院」という天皇並みの称号と俸禄が貰えるようになった。皇位の枠は道長のもう一人の孫・敦良（あつなが）親王に渡った。

—さて肝心の紫式部はどうなったのか？彰子皇太后の使いとして、藤原道長に対抗する唯一の公家である藤原實資との連絡に当たったことは学者の考証で判明している。そして懸案の「源氏物語」もこの頃に完成したと思われる。しかし偉大な女流文学者・紫式部は、この頃に忽然として後宮から消えてしまった。理由としては「権力者・道長による追放」が考えられている。

道長と式部は恋愛関係にあったようだが「可愛いさ余つて憎さが百倍」と言う。紫式部の死亡年代には多くの説が有つて真相が不明なのである。彰子皇太后が藤原實資に近づき、その仲介役が式部だと知った道長は、皇室にある自分の娘二人が自分の野望を妨害していることで式部を責めた。寛仁二年（1018）には、この世に居なかったという説に従えば、式部は道長に消された：

それでも不朽の名作は残った。王朝文学は贅沢で華麗な夢の話だが、それを支えていたのは貧困にあえぐ庶民だったことを忘れてはならない。

「歴史の里」で、ほんの一部分ながら、その過去を辿ってみることは、時代の圧政下で泥にまみれて暮らした多数の無名の人々の鎮魂になりはしないか？僭越ではあるが、密かに思っている。

世界一小さな物語「一行文」

(絵と「行文教室より」)

有村政子

- ・赤紫の筑波山に今年の気持ちをつたえる
- ・この冬一番に逢った

- ・赤と白の間の桃色です
- ・芽

平野みつ江

- ・河原子の海をながめて露天風呂
- ・太平洋をながめて友と裸のつきあい

木村靖子

- ・スエードのジャケット軽やかにぬくもり
- ・朝霜の葉ポタンおはよう
- ・からっぽにしてゆつくりゆつくり

文章を書くことにとっても臆病になっていたり、勝手に上手な文章とか下手な文章とかの尺度をつくってしまったという人が大勢います。

教室の人にはいつも言っています。文章に上手だとか下手というのはありません。国語の教科書などに名作小説の冒頭文などが紹介され、それを授業の中で教師が上手な文章というよう話をします。そういうことが固定観念化され、上手な文という考えが住み着いてしまっています。しかし、このような考え方は誤りであると思つて頂きたい。

名作と呼ばれる小説の文章は、表現力が素晴らしいのであって、文章の書き方が上手なのではありません。例えば「吾輩は猫である。名前はまだ無い」という文章、上手な文章かといえば普通の日常言葉である。この小説が名作なのは、文章が上手だからではない。学校での教え方に問題があるのですが、多くの人が文章に上手下手を尺度してしまいます。その挙句に、下手な文書と言われたら恥ずかしいだとか、上手な文章を書きたいだとかを考えてしまい、文章を書くことをやめてし

まいます。そして、残念なことに文章を書くことが嫌いになってしまいます。

公文書でなく自分の文章を書くというのは、自分の思いや感情を表現するものですから、そこには上手下手はありません。公文書や説明文は簡潔に正しく言葉を選択する必要がありますが、自分を表現する言葉は「きれい」とおもえば「きれい」とだけ書けばそれでいいのです。そこには上手下手はありません。

自分の感情を表現するのは、自分の感じた言葉をそのままに書けばそれでいいのです。他人が見たら何だ、と思うことであっても自分が「きれい」と感動したのだから「きれい」で良いのです。

今回紹介した一行文の中に、有村さんの「芽」という一文の文章があります。一字で文章か？と思われる方もいるかもしれませんが、立派な一行の文章です。歌であり物語になっています。

芽、という一文の文章ですが、有村さんが出会った「芽」の物語が感じられて、私はとても大好きです。有村さんならではの自己表現であると思います。一行文というのは、その日その時に出会った感動を一枚の絵として、言葉に落とすわけですから、これはもう立派な絵であり、文章であり、物語です。(白井啓治)

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治)

ギター文化館発：ことば座第12回定期公演

里子「大地の舞い」

2月22日（日曜日）開演午後2時

畑から飛び出した縄文人の男は言った。

『里子、お前は常陸娘子（ひたちをとめ）。お前がこの里に鋤を打ち、豊穣の時を紡がんとするのなら、常陸娘子らしく男に恋をせよ。畑家を耕し豊穣を願うのであれば、お前は男と交し合い産霊（むすび）の神の力を持って』...と。



脚本：演出 白井啓治
美術（背景画） 兼平ちえこ
（装美） 小林一男

朗読 しらみひろぢ
朗読舞 小林 幸枝
土笛 野口 喜広
太鼓 矢野 恵子

入場料3000円（前売券2500円）

※前売券はギター文化館0299-46-2457、いしおか補聴器0299-24-3886にて取り扱っております。

ことば座

〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

TEL0299-24-2063 fax0299-23-0150